

Loris Sturlese:

*Die deutsche Philosophie im Mittelalter*

Von Bonifatius bis zu Albert dem Großen

(748-1280)

Verlag C. H. Beck München, 1993, 439S.

山 崎 達 也

最近のドイツにおける中世哲学研究において最も注目されるべき動向は中世ドイツ・ドミニコ会の思想系譜の研究にあるといえよう。この新しい傾向の端緒はドイツ・ポッフム大学哲学部の K. Flasch, B. Mojsisch, スイス・フライブルク大学の R. Imbach 等が中心となって編集し、1977年以来刊行し続けている『中世ドイツ哲学者叢書』(Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi=CPTMA)にある。このなかには、Ulrich von Straßburg, Dietrich von Freiberg, Johannes Picardi von Lichtenberg, Heinrich von Lübeck, Nikolaus von Straßburg, Berthold von Moosburg 等の思想家が含まれている。こうした研究は、日本においても最近盛んになりつつある同じくドミニコ会士であった Eckhart 研究にも少なからず影響を与えており、この系譜の中に Eckhart の思想を位置付けまたは他の思想家と比較対することによって彼の思想の独自性を際立たせようとする研究がされ始めている。さらに、CPTMA の刊行のもたらす影響はこれだけにとどまらず、これによってドイツ・ドミニコ会の思想の淵源ともいべき Albertus Magnus と CPTMA の思想家または Eckhart との関係が重要視されるようになってきた。本書はこうした新しい研究動向のただ中から生まれ、中世ドイツ哲学史に関して初めて著された記念すべき結実といべきものである。

本書の著者 L. Sturlese は CPTMA の編集責任者の一人でもあり、イタリアの新進気鋭の哲学史家である。彼はまた 1936 年以来 J. Koch 等の手によって編集されてきた Eckhart 全集の批判的校訂版ラテン語著作集第 3 巻 (『ヨハネ福音書注解』) を昨年の 9 月に完成させ、なお引き続き同じくラテン語著作集第 5 巻に含まれている Acta Echardina を編集していることでも知られている。さて、本書はもともと 1990 年に同じタイトル (Storia della filosofia tedesca nel medioevo) でイタリア

語で出版されたものに、第4章の一部と第10章「《ハンディ・アッシュケナス》：中世最盛期ドイツにおけるユダヤ哲学思想についての短い付説」、第11章「13世紀ドイツにおける哲学的詞華集、百科全書とフランチェスコ会の霊性」そして第12章「アルベルトゥス・マグヌスの哲学的・自然科学的理性主義」の3章を加えて著者自身のドイツ語にて刊行されたものである。なお、序論にも述べられているように、CPTMAの別冊として1983年に出版された論文集『マイスター・ディートリヒからマイスター・エックハルトへ』に掲載された著者自身の論文「アルベルトゥス・マグヌスからベルトホルト・モースブルグまでのドイツにおけるプロクロスとヘルメス」(Proclo ed Ermete in Germaniania da Alberto Magno a Bertoldo di Moosburg)が基になっている。さて、この力作の充実した内容の詳細な紹介は紙幅の関係上不可能であるので、以下において、本書全体に脈打つ著者の基本的研究態度そして最終章の第12章について若干述べることにしたい。

著者によれば、中世研究にはある固定観念がいまだに支配している。それは、キリスト教的ヨーロッパの統一的文化の統一的な表現はいずれにせよスコラ学であって、一つの国家という視点の下での考究は中世研究には適さない、というものである。また「ドイツ哲学」というテーマは19世紀のドイツの思想家と思想のナショナルスティックな誇張やいわゆるナチスによる思想のイデオロギー的な私物化を想起せしめる。そのためにこのテーマを掲げることは不評を買うことになる。さらには、ドイツは数世紀にわたって不毛の地であり、13世紀中葉のドイツは哲学的に乏しい「田舎」(Provinz)であったという検証がいままでの通例であった。確かに、中世ドイツの精神世界は事実「田舎」であったが、しかしこの「田舎」という語で何が意味されているのかと著者は問う。著者によれば、「田舎である」ということは当時の哲学研究の中心地パリから遠く離れたドイツの精神世界からその統一性と内的活性を奪うことを意味しない。ここでは、「パリの」パースペクティヴからではなく、「ドイツ的」視点から中世ドイツに起こった精神的動向が探求されるべきであるという著者の意図がうかがえられる。そして「ドイツ的」とは人種的な意味合いで使われるのではなく、むしろ地理的に規定された文化史的意義が付せられなければならない。この意味から本書においては、ドイツにおけるユダヤ思想にも言及されている。本書は、著者自身の言葉を借りれば、新しい「地域的哲学史」(regionale Philosophiegeschichte)研究への試みである。

さて、ドイツ哲学史のなかで画期的な出来事は1248年にケルンにドミニコ会の学問研究所いわゆる *studium generale* が設立されたことである。修道院の学問所はその地の大学と緊密な連携をとるために大学がある地域に建てられるのが通例であったが、当時のケルンには大学がまだなかったことを考慮すれば、ケルンの *studium generale* の設立は例外である。それは当時において大学というべきものであって、14世紀中葉まで国際的水準の文化施設であり、ドイツ語圏のみならず全ヨーロッパにおける哲学的、自然科学的、神学的思想のさらなる展開に決定的な影響力をもっていた。そればかりでなく、*studium generale* はその改革的理念によってパリ・スコラ学に対して初めて「ドイツ的手法」を表明した、活発な哲学論議を巻き起こしたのである。そのことによって、ドイツ・ドミニコ会は自らの教育をヨーロッパ的水準へと引き上げたのである。こうした *studium generale* の使命からみて、Albertus がケルンの地で教鞭をとっていたということの影響は基大なものがある。彼の思想は特に Thomas との関係からいままでは論じられてきたが、著者は一貫して師 Albertus の思想を継承し発展させた CPTMA の思想家と Eckhart そして彼の後継者 Johannes Tauler との関係を扱っている。以下において、Albertus における哲学と神学との区画と知性論そしてその後の影響についての著者の論述を辿っていくことにする。Albertus がケルンにてアリストテレスの *Ethica* についての講義を開始したことは一つの「転回」であると著者は言う。この「転回」とは、古代の哲学的理性主義との対決を通して、Albertus の関心の重点が神学から哲学へと移行したことによってもたらされたものであり、それまで二本の柱すなわち教父と神の言葉に基づいて神学者の養成がなされてきた威厳的伝統からの解放を意味する。これにともなって、哲学と神学との厳密な区画が求められてくる。両者の違いは、彼によれば、その構造や方法によってではなくその原理によって明かとなる。例えば、神学的原理「世界は創造者の自由意志の行為によって突然に造られた」に対して哲学的原理「一つの原因からは唯一の結果しか生じない」が対立し、また「死者は復活する」には「欠除から所持への逆行はありえない」が対立する。哲学の特徴は自然理性の適用によって論証的結論を言葉によって表明する能力にあり、著者によれば、Albertus は哲学を神学的根本主義の拘束から解放しようとしたのである。このことには同時に学問への不当な干渉から洗練された学としての神学を打ち立てることが意図されている。しかし Albertus による両者の区画はそれ自体として問題を残しており、後にそれは天使と

離存実体 (intelligentia) との同一性の問題とも絡み合って、彼のドイツの弟子たちの間で論議の中心となっていくが、特に Dietrich, Berthold, Eckhart von Gröndig によって主題化されていくことになる。

ところで Albertus によれば、「人間を人間たらしめているもの」すなわち人間の真なる本質は知性としての知性 (intellectus, in eo quod intellectus) つまり intellectus agens である。そして人間の真なる本質は何であるのかまた何であったのかを人間に自覚させることが哲学の主要目的である。このテーゼは14世紀のドイツ・ドミニコ学派の発展において決定的な役割を演じ、いわゆる「ドイツ神秘主義」の中心テーマとなる。しかしながら著者によれば、Albertus における intellectus adeptus は神秘主義と全く無関係でなければならない。《homo fit similis quodammodo deo, eo quod potest sic operari divina... et accipere ominia intellecta quodammodo》(De an., Stroick, 222) における omnia intellecta とは実際には星辰の運行を知ることであり、その結果、宇宙の自然現象を司る因果的過程に通ずることを意味する。つまり Albertus はここでは哲学的・自然科学的問いを解いているのであって、intellectus adeptus についての彼の理論を神秘主義と解するのは間違いである。人間の「真なる本質」の再発見と回復は根本的には理性的知識を獲得していくなかで実現される。これは Albertus の哲学的・精神的至福論であるが、ここには単なる知性的観想の枠を克服し、哲学的活動の現実面を築き上げようとする試みがうかがえられる故に「神の人間」(De int. et intell., Borgnet, 517) や「完全なる人間」(Metaph., Geyer, 7) はキリスト教的神の直観的体験のなかで自己喪失した神秘家でもなく、静なる観想のなかに安らうアリストテレス的哲学者でもない。彼は《nexus Dei et mundi》としてのヘルメスの人間である。こうした人間の認識能力と認識行為の自然哲学的定義は人間の《Naturalisierung》であるとする L. Hödl の説に与しながらも、それは人間の《Humanisierung》をも意味すると著者は言う。何故ならば、Albertus はギリシア、アラビアの哲学との対決の過程において、人間本性の根拠を知性の全く自然的原理に定着させるに至ったからである。

本書は、Albertus を一つの分水嶺として、中世ドイツ哲学について初めて著された研究書であるが、現在継続中の Albertus の批判的校訂版の刊行とともに、Albertus 研究にも光と投じることになるであろう。この後の著者の成果に期待をしたい。